



ごあいさつ

けやき会 会長 奥村 和代



けやき会会員みなさま、初めまして。芝田健輔元会長から兵庫県立大学同窓会会長を引き継ぎました、奥村和代です。庶務、副会長を務め、この度、会長を務めることとなりました。よろしくお願い申し上げます。

さて、昨年度のけやき会会報がみなさまのお手元に届いてからこれまでを振り返ると、新型コロナウイルス感染症の影響で世界は大きく変わったように思います。思い返すと、私は新型コロナウイルス感染症に関する報道を、初めはどこか他人事のように聞いていました。しかし、それを一気に身近に感じる出来事が私の身に起こりました。なんと、仕事終わりに立ち寄ったドラッグストアのトイレトーパー・ティッシュペーパー・キッチンペーパー・マスクの棚が、空っぽになっていたのです。そのような光景を実際に目にしたのは、生まれて初めてでした。前日まであったものが一気になくなったことに疑問を感じ検索をしたところ、原因が判明し、言葉にできない不安と恐怖を感じました。その後、海外ではロックダウンが実施されたり、日本では緊急事態宣言が発表されたりと、私にとって未経験のことが続き、その影響で仕事でも前例のないことに対応することが続きました。そのような状況の中、「ピンチはチャンス」と言い聞かせながら試行錯誤を積み重ねることで新たな発見もあり、大変な中でも広がる可能性を感じながら仕事をしていました。しかしそのうち、仕事に行くのが億劫に感じはじめました。そうやって初めて、知らず知らずのうちに心が疲れていたことに気づきました。

そのような私の心を救ってくれたのは、“人”と“適度な情報”でした。みんなそれぞれに大変な状況であるにも関わらず、色々な方から病院で勤務する私を気遣うメッセージが届きました。マスクが手に入らない時期に、貴重なマスクを送ってくださった方もいらっしゃいました。人のおもいやりを肌で感じ、人の優しさが心に染み渡るといった感覚を味わいました。また、利害関係のない人とお互いに率直な気持ちを言葉にすることで、人との会話で心

が軽くなる感覚を思い出しました。外出自粛をしているうちに、知らぬ間に、人とのあらゆる交流を閉ざし、情報とも距離を取りすぎ、自分で自分を追い詰めていたのだと思います。

みなさまも、仕事・プライベートともに色々な影響を受け、その都度いろいろな気持ちを感じながらも工夫をし、新型コロナウイルス感染症とともに日々の生活を送っていらっしゃると思います。今回の会報では、新型コロナウイルス感染症とどのように付き合っているのかを、学部生・大学教員の立場から原稿をいただきました。この会報を、色々な情報に触れる機会にしていたら、その情報をけやき会会員みなさまが置かれている状況に応じて、希望ある未来のために活用していただけますと幸いです。また、みなさまには大学時代の恩師・同級生という心強い味方がおり、大学・同窓会という活用できる資源があることを感じていただける機会となることを願っております。



学術情報館からのお知らせ

学術情報館では、卒業生・修了生の学習・研究活動支援のため、次のサービスを提供しています。(1) 医中誌Webの検索サービス(窓口で申請)(2) 医中誌Web、PubMed検索時に入手可能と表示されたMedical Online、ProQuestの文献複写サービス(窓口で申請、受取り)(3) Medical Online、ProQuestの文献限定で複写サービス(電子メールで申請、郵便で返送。1文献あたり上限15枚、一人年間10回を目安)(4) Medical Onlineのアブストラクト(1件110円)が無料で検索可能となるID/PWを提供

お問い合わせは、laic-akashi@lib.laic.u-hyogo.ac.jp までご連絡ください。なお、これらのサービスは、卒業生・修了生以外の方は利用できません。

けやき会HPリニューアルオープンお知らせ

けやき会HPをリニューアルオープンしています。

URL : <https://keyaki-kai.com/>

内容の充実、管理情報の一元化とセキュリティの強化、電子媒体の利用によるコスト削減などを目的に、名簿管理や会報発行でお世話になっている株式会社サラトにHP開設を委託しました。コンテンツも充実しておりますので、ぜひご覧ください。





現在の学校生活について

2019年学生会会長 大森 英恵

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、多くの大学が対面授業の代わりにオンライン授業を行っています。ここでは、現在私たちがオンライン授業の中でどのように学んでいるか、実習はどのように実施しているのかをお伝えします。まずはオンラインでの授業についてです。看護学部でのオンライン授業ではzoomを活用した生配信で実施されています。事前に講義や演習の資料が配付され、その資料に基づいて講義や演習が行われました。資料に加えて講義の中に画像や図を用いてくださったり、先生方が手作りの動画を作成してくださり、オンライン授業のなかでもたくさんの工夫があり私たちも学びを深めていくことができます。また看護学部のオンライン授業はすべて生配信であることを生かし、同級生とのグループワークの機会も設けてくださり、自分一人では気づけなかったことに気づいたり、同級生の意見を聞いて別の視点から考えたり、グループワークならではの学びを得ることができました。

次に実習についてです。本学では例年とほぼ同じ時期から各学年実習が始まりました。私も6月末から生涯広域健康看護実習に参加しています。前期の実習では臨地で実習ができた領域とオン

ラインでの実習になった領域がありました。私の場合は、前期は実際に病棟で実習に行くことができました。今までよりも実際に病棟に行くことができた期間は短くなってしまいましたが、疾患・病態や患者さんと実際に関わる中で生活背景や社会性、セルフケアなどを踏まえた看護支援について学ぶことができました。オンラインでの実習では模擬事例を用いて看護支援を検討する、実際に保健師さんの話をzoomで聞く、妊娠・出産・育児の体験談を聞き理解を深めるなど領域に応じたオンライン実習が設定され、それぞれが学びを深めることができました。

今までとは全く異なる学校生活に戸惑うことも多く不安なこともたくさんありましたが、先生方や同級生、先輩後輩そして家族の支えもあり少しずつ新しい学校生活に慣れることができました。後期からは対面授業も少しずつ再開されていきます。また後期はほぼすべての領域が臨地で実習になります。実習期間のアルバイト禁止や外出自粛などさまざまな制約はありますが、病棟など学外で実習させていただける環境に感謝しながら看護への学びを深めていきたいです。

コロナ禍での前期を振り返って

兵庫県立大学看護学部生涯広域健康講座Ⅱ 精神看護学 教員一同

けやき会の皆様、こんにちは。看護学部では前期4月第3週目よりZoomを用いたオンライン授業になりました。今回は初めて取り組んだ遠隔実習についてご報告したいと思います。

精神看護学が担当する実習は、5月から統合看護実習（4年生）、6月から生涯広域健康看護実習（3年生）が始まります。臨地実習に全く行けない前期はすべてLiveで、後期は、臨地実習（4日間）と学内実習、遠隔実習を組み合わせで行いました。

通常の臨地実習では、一人の患者さんを受け持ち、患者—看護学生—の関係構築（形成—発展—終結）しながら看護ケアを展開することを目標にしています。しかしながら、今回遠隔実習にかわり、この目標をどのように展開することができるのかという点について非常に悩みました。

前期の遠隔実習では、教員が受け持ち患者となり、臨床状況に応じてご家族や支援者の役を演じながらケアの展開を行いました。また、実際のカルテが見れないため教員が看護記録（経時記録）を作成し、日勤夜勤の記録を日々更新させながら学生が毎朝アクセスできるようにしました。後期の遠隔・学内実習では、教室メンバー（ゼミ生・大学院生・教員）で作成した動画学習【統合失調症の患者さんへのかかわり（妄想の表出・服薬支援・作業療法）、うつ病の患者さんへのかかわり（希死念慮の確認）】をもとにグループディスカッションを踏まえ、教員が患者役になってロールプレ

イを行いました。

特に「挨拶や行動目標の発表」から、「ケアにいかすための情報共有や相談ができるような場づくり」や「精神保健福祉士や作業療法士、公認心理師の方のお話を伺うこと」で学生が臨床の雰囲気や少しでも感じられるような工夫をしました。また、ピアサポーターの方にご協力いただき、入院体験を伺い看護ケアについて考える機会をいただきました。学生、教員ともに「受け持ち患者とのかかわりの時間が限られていること」で、焦ってしまうこともありましたが、一方で学生と多くの時間を過ごすことで、学生の気づきや思い、患者さんの思いを知る機会にもなり、講義や演習、実習内容を再度検討する機会にもなりました。この経験を生かして、今後も実りある教育内容にしていきたいです。



作業療法の場面
ホールで患者さんと学生が一緒に作業療法に参加する



CNAS同窓生の皆様に感謝!!

看護学部長 工藤 美子

皆様、いかがお過ごしでしょうか。今年の4月から看護学部長をさせていただいております工藤美子です。卒業生・修了生の皆様は、様々な医療の現場や社会を支え、各々の立場で事態の改善に向けて努力されていることと思います。心より敬意を表し、感謝しています。

学部長の職を担うこととなった4月から新型コロナウイルス感染症対策と教育の質保証のために、明石看護キャンパスの教職員は一丸となって様々な対応を行っています。10月からの後期授業は、1学年の学生全員が受講する遠隔授業あるいは、1学年の半数の学生が座席指定の教室で対面授業を受け一方、残りの学生は対面教室から配信される遠隔授業を自宅あるいは別の教室（座席指定）で受講するハイブリッド授業を主とし、一部講堂で1学年全員に対面授業をしています。また、2回生や3回生の実習は、制限はあるものの実施できています。

さて、今年度は入学宣誓式が行われず、毎年恒例の新入生オリエンテーションは、8月の健康診断や対面での演習のために7月30日に実施し、新入生は初めて明石看護キャンパスの建物に入りました。とはいえ、看護学部は他学部よりも早くに（4月20日から）授業を開始し、4回生の実習もすべて遠隔実習とし、多くの卒業生・修了生の支援を得て、実施することができました。

ご協力いただきました皆様には、この場をお借りして御礼申し上げます。ご協力いただいたのは、①遠隔授業のアシスタント（TA）、②妊娠中や子育ての体験を伺う母性看護実習、③手術看護やICU看護、心筋梗塞や心不全の患者さん等に対する看護の経験や外来や地域医療連携室での実践をお話いただく成人看護実習、④学生が抱く「がん看護の実態に関する疑問」に地域連携室、訪問看護、外来化学療法室等ががん看護に従事している方に対応いただくがん看護実習などです。私は母性看護学の実習でご協力いただき、通常の実習では伺えない妊娠中や子育ての体験をいつも以上に知ることができ、妊娠中の仕事の仕方、入院中の体験や思い、退院後の自宅や実家での生活など多岐にわたって子産み子育ての実状を知ることができました。本当にありがとうございました。良い実習ができたと思っています。

まだまだCOVID-19の感染は終息しそうにありませんが、皆様の力をお借りして、人々の暮らしと健康を支援できる看護職の育成に尽力したいと思っています。今後ともよろしくお願いします。



COVID-19対応に貢献するCNASのみなさまに送るエール

看護学研究科長 大野 かおり

コロナ禍にあっても実践家として卓越した看護を提供されておられる方、感染を予防しつつ教育の維持・継続に尽力されておられる方、ウィズコロナ・アフターコロナ社会の構築に向けた研究に取り組んでおられる方など、みなさんにはそれぞれの分野においてご尽力される毎日と存じます。冬を目前にして感染者は急増、第三波到来との報告もありますが、5月末に緊急事態を脱することができたのは国民一人ひとりの感染予防対策の功だけでなく、CNAS卒業生・修了生をはじめとする看護職の懸命で献身的な取り組みの賜物です。しかし、看護職には差別や偏見もあり、からだはもちろんのこと、こころが折れそうになるのを堪え苦しみながらコロナと向き合っておられることと察じています。

個人的な話になりますが、私は阪神・淡路大震災当時、神戸市東灘区で保健師として働いていました。甚大な被害への対応で心身とも辛い日々でしたが、COVID-19災害との違いは、全国各地から被災地に看護職が集まりサポートして下さったということです。この違いの誘因の1つは『COVID-19災害は日本全体が被災地であり、全国民が被災者である』ことだと思います。COVID-19災害では未知の感染症、見えないウイルスが全国に拡がり、国民の生活や行動を脅かしています。「正しく恐れる」ことが大事なのですが、見えない脅威は大きく、外部からの支援は限られ、看護職の負担は計り知れないものとなっています。

このような状況の中、第一線で働くみなさんには感謝と尊敬しかありません。ロックダウン中のイギリスでバンクシーが新作を発表しました。さまざまな反響がありましたが、世界赤十字デーの前日に公開されたことから「コロナの最前線で闘う医療従事者の献身や努力に捧げた感謝の気持ちであることは間違いない（<https://bijutsutecho.com/magazine/insight/21875>）」といわれています。まさにみなさんは世の安寧を取り戻すために活躍する勇士です。「勇士になるより、安らかな生活がほしい」と思われる方もおられるでしょう。みなさんの平穏な生活を一日でも早く取り戻せるために私たちが激動の社会を支えられる看護職を育成し、ウィズ・コロナの時代に向けてレジリエントな社会づくりに尽力します。

しばらくはCOVID-19対応に追われる日々が続きます。しかし、時はコロナと戦う時期からこれまでの経験値を活かしてコロナと向き合う時期にかわってきています。正しく恐れながら感染症とともに生きる方策を一緒に考えていきましょう。そして、マスクを外してともに笑える生活をつくりましょう。

みなさんの貢献に捧げる敬意と、コロナ対応に奔走する同志としてともにCOVID-19対応に取り組む志を私からのエールとします。

一句『夏草をきれいに刈って、夢描く』

兵庫県立大学 副学長 内布 敦子

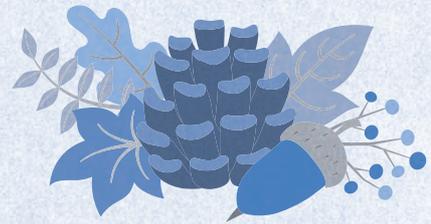


けやき会の皆様、こんにちは。ご無沙汰しています。兵庫県立看護大学の1期生は、すでに20年のキャリアをもつエキスパートになられており、修士修了生、博士修了生の方々を含めて、今や兵庫県のみならず我が国の看護・医療界で中核、リーダーと言われる存在になっておられます。それぞれの場での活躍に触れるたびに、誇りに感じています。学生の活躍はもちろんですが、教員たちの活躍も素晴らしいものがありました。初代学長の南裕子先生（現神戸市看護大学学長）は、そのころから日本だけでなく世界の看護をけん引してこられ、現在もオピニオンリーダーとして看護界を超えて多くの人々に影響を及ぼし続けておられます。

本学に関わった素晴らしい研究者たちを皆さんは認識しておられるでしょうか。1993年3月、開学に合わせてアメリカの留学先から明石に赴任し、私が驚いたのは、看護大学を支える研究者リソースの豊かさでした。著書等でその洞察に感銘させられた研究者の講義を生で聴くことができる学生がうらやましかった。疫学の青山英康先生、歴史学の立川昭二先生、文化人類学の波平恵美子先生、そして南先生や片田

先生のおかげで、海外からもPatricia Benner先生をはじめ世界的に著名な複数の看護の研究者が年に何回も来訪して下さり、講演のあとも彼らの考えを聞くことができる豊かな環境がありました。学生がどう認識したかはわかりませんが、兵庫県立看護大学の教育環境はけた違いであったと思います。

ある時、古参の教員が「100年たてば何もなくなくなり、昔ここには兵庫県立看護大学という看護師の学校があったんだって・・・とされているかもしれないね」というのを聞いて、「100年どころかもっと長い歴史を紡ぐ可能性のある大学になんてことを言うんだ」と思いましたが妙に頭にこびりついています。ぼーっとしていても時間は立ちますが、歴史を紡ぐのは難しいことです。県立大学として統合され、法人化され、私も現在、法人本部で勤務していますが、予算を切られたら、あっという間に落ちぶれてしまう危うさを感じています。『夏草や兵（つわ）ものどもが夢のあと』ではなく『夏草をきれいに刈って、夢描く』を期待する今日この頃です。みんながんばれ！



トカルチュク風に

丸橋 裕

足を止めて空を見上げると、一本の楠の巨樹が木々のあいだからいくつもの枝を大きく広げているのが目に入る。私のお気に入りの木だ。毎朝この八幡神山を散策することにした理由の一つがこの木だった。樹齢700年にも及ぶといわれるこの植物に挨拶をおくる頃には、家を出たときに聴き始めたブルックナーの第二交響曲のアダージョが愛らしいテーマをゆっくりと響かせている。山頂から京都盆地を見はるかすと、麓の合流地点から木津川、宇治川、鴨川、桂川と溯って、城陽や宇治の山並み、如意ヶ嶽、比叡山、嵐山を経て、愛宕山までが一望される。しばらくして粗樫や孟宗竹の樹林を抜けて帰路につき、フィナーレのコーダが壮麗な終止符を打つころには麓にたどり着く。姿の見えない小鳥たちの名前を教えてくれるひとがもしそばにいれば、申し分のない日課だ。

午前中はプラトンを読み、午後はヴァイツゼカー、夜はヴァーグナーを楽しむというのが4月からの目論見だったが、8月中旬以来、終日寸暇を惜しんでヴァイツゼカーのテキストと格闘する毎日が続いている。文字通りのひきこもりだ。通勤列車に揺られ、講義の準備や校務に追われていた日々からはまさに隔世の感があるが、これは退職前かすでに織り込みずみのことだった。ただ心残りなのは、研究室を訪れる人たちとの対話を楽しめなくなったことだ。慣れないリモート講義で孤独に苦しんでいる学生たちはいないだろうか。医療の現場で日々病む人たちと向きあっている卒業生や修了生たちは、想像を絶する負担を強いられて心を病んではいないだろうか。自助なんて人から言われなくても精一杯やっている。真っ先にやらねばならないことはいったい何なのかを、考えるべき人が真剣に考えているのだろうか。――

石井先生の悲願だったヴァイツゼカー『自然と精神／出会いと決

断』の邦訳がようやくこの10月に法政大学出版局から公刊される。新たな時代の危機／転機に直面させられているわれわれ自身が、何を感じ、思惟し、いかなる活動に身を向ける決断をなすべきなのか。そのことを考えるきっかけを、この書は豊かに与えてくれるはずだ。ぜひ一読のほどを！ また、最終講義にご参加いただけなかった方は、以下のサイトにアクセスしてみられたい (<https://youtu.be/fHJtxSu9HBs>)。兵庫県立大学で交わりをもったすべての方々が、心身の善きあり方を可能なものとされることをこころよりお祈りして、筆を擱くことにしよう。

2020年 晩秋

『いまや新しい時代がやってきている!』(シリーズ「書齋の窓から世界を見る」より)

オルガ・トカルチュク、プレスラオ在住

(2020年4月1日付『フランクフルター・アルゲマイネ』紙)

窓から外を眺めると、一本の真桑が目に入る。私のお気に入りの木だ。ここに引越してきた理由の一つがこの木だった。この真桑の木は物惜しみをすることのない植物で、たつぷりと春と夏のあいだ中、その甘くて滋養に満ちた果実で小鳥たちの何十もの家族を養う。しかし、この木には一枚の葉もないので、静かな通りの一隅が見わたせる。その通りを歩いて公園まで行く人はめったにいない。プレスラオの天候はほとんど夏だ。太陽は眩しく、空は青く、空気は澄んでいる。今日、愛犬と連れだって散歩に出かけたとき、2羽の鶺鴒が1羽の梟を巣から追い払うのを見た。その梟と私はほとんど1メートルもない距離からお互いの目を見合った。動物たちも私たちの身に起こることを待ち受けているようにみえる。すでにずっと以前から、私を取り巻く世界が私にはあまりにも多すぎた。あまりにも多く、あまりにも早く、あまりにも騒々しすぎた。だから私にはいま「隔離のトラウマ」などない。人びとに会えないことを悩んだりもしない。映画館が閉まっていることを残念だとも

思わない。ショッピング・モールが休業中であることにも無関心だ。そこでいま働き場を失っているすべての人たちのことを考える場合は別だけれど。予防的な検疫隔離のことを聞くと、一種の安堵を覚えるし、多くの人びとが、たとえそのことを恥ずかしく思っている、同様に感じていることを知っている。このようにして、過度に積極的な外向性の人びとの絶対的命令の下で長いあいだ苦しんでいた私の内向性は、塵を払いのけ、地下室から出て来たのだ。

窓を通して隣人の姿が見える。働き過ぎの法律家だ。つい先日までは、毎朝、彼がローブを腕に裁判所へ赴くのが見えた。いま彼は、袋状のトレーニング・ウェア姿で庭にいて、一本の枝と格闘している。明らかに片づけをしようとしているのだ。若いカップルが老犬を散歩に連れて行くのが見える。彼は昨年の冬以来もはやほとんど歩くことができない。彼はあちらこちらへとよろめくので、若い二人は忍耐強く彼に付き添い、できるだけゆっくりと歩いて行く。その間、ゴミ収集車が大きな騒音を立ててゴミを取り集めている。生活はさらに進んでいく。これはまあ当たり前のことだ。しかし、調子はまったく異なっている。私は棚を片づけ、読み終えた新聞紙をコンテナまで運んだ。花々を他の鉢に植え替え、自転車を修理から持ち帰った。私の喜びとなっているのは料理をすることだ。

ヴィールス以前の世界が正常ではなかった

くり返し私の心に浮かんでくる子ども時代の光景がある。その頃にははるかにもっと多くの時間があり、時間を「無駄にする」ことが許されていた。何時間も窓の外を眺め、蟻の行列を観察し、机の下に横になってそこが避難所であるかのような想像をした。百科事典を読んだりもしたものだ。これは、私たちが正常な生活のリズムに戻ったということではないのだろうか。ヴィールスが規範を傷つけているのではなく、むしろその逆、つまり、ヴィールス以前のあのせつかな世界が異常だったということではないのだろうか。要するに、ヴィールスは私たちがかくも熱狂的に抑圧してきたものについての記憶を呼び覚ましたのだ。すなわち、私たちがきわめて壊れやすい素材でできた傷つきやすい存在であるということ。私たちが死ぬということ、死すべき者であるということ。私たちが世界から、私たち「人間の本質」や際立った特質によって選り分けられてなどないということ。そしてむしろ、世界が一種の大きな網のようなもので、私たちがその網にかかっている、目に見えない依存と影響の糸によって他の存在と結びつけられているのだということ。私たちが互いに依存しあっていて、そして、私たちが——いかに遠くの国々の出身であろうとも、どんな言葉の話そうとも、肌の色がどんなであろうとも——、まったく同様に病気になり、まったく同様に不安を感じ、まったく同様に死んでいくということ。それは私たちに明らかにしてくれたのだ——私たちが危機に直面して自分たちをいかに弱く、無防備だと感じようとも——、私たちの周りには、はるかにもっと弱くて、助けを必要としている人たちがいるということ。それは私たちの記憶を呼び覚ましてくれたのだ。私たちの年老いた両親や祖父母がいかにひ弱な存在であり、かれらがどれほど私たちのケアを受けることに値する存在であるかを。ヴィールスは、熱に浮かされた私たちの変動性が世界を脅かしているということ、私たちに示してくれた。そしてそれは、私たちがあえて問おうとすることなどめったになかった問いを呼び覚ましてくれた——私たちはいったい何を求めているのか、と。したがって、この病いに対する不安は、私たちの錯綜した道から私たちを連れ戻し、私たちがそこから巣立ち、そこにおいて安全だと感じることのできる巣があるということを思い起こさせてくれた。そしてたとえ私たちが最も偉大な世界旅行家であったとしても、——このような状況にあるときはいつも、ある種の故郷に向かって懸命に進もうとすることであろう。

昔に逆戻りした信念が回帰してくる

それとともに私たちにとって悲劇的な真実も明らかになった。危機の瞬間には、閉鎖し、境界を設けようとするカテゴリー、つまり民族と国境のカテゴリーでものを考えるやり方が戻ってくる。この困難な瞬間に示されたのは、欧州共同体の理念が実践においてはいかに脆弱なものであるかということだった。要するに、欧州連合は降伏し、この危機の時代におけるさまざまな決断を国民諸国家にゆだねたのだ。国境の閉鎖を、私はこの惨めな時代の最大の敗北だとみなしている。つまり、そこに戻ってきたものは、古いエゴイズムと「身内」／「よそ者」のカテゴリー、すなわち、自分たちの思考が二度とふたたび初期化されないようにという希望をもって私たちが闘いを挑んできた当のものだったのだ。ヴィールスに対する不安は自動的にこの上なく単純な、昔に逆戻りした信念を呼び覚ましてしまった。「よそ者」に責任がある、危機をもたらすのはいつも「よそ者」だろうという信念を。ヨーロッパにヴィールスがやってきたのは「外から」だった、それは私たちのものではなく、他者のものだ。ポーランドでは外国から入国したすべての人たちが疑われた。

[訳註：3月13日のモラヴィエツキ首相による「感染脅威事態」宣言を指す。その後、17日に欧州理事会は、欧州連合による一時的な入域制限措置の導入に合意した。]

バタンと閉じられた数多くの国境と国境通過地点に生じた長蛇の列は、たしかに多くの若者たちにとって衝撃だった。ヴィールスは私たちに、国境がさらに存在しつづけ、健在であることを思い起こさせる。私が恐れるのは、ヴィールスが私たちにもう一つの古い真実の記憶を呼び覚ますのではないかということだ。それは、私たちがお互いにどれほど同じでないかという真実だ。私たちのうちには、自家用機で島の自宅に飛んだり、森の孤独に耽ったりすることができぬ人々もいるだろう。他方で、発電所や水道設備を保全するために都市にとどまる人々もいるだろうし、店舗や病院の仕事で自分たちの健康を危険にさらしている人々もいるだろう。疫病で儲ける人々もいれば、生活の蓄えをなくす人々もいるだろう。迫り来る危機は、ひょっとすると、私たちにかくも安定したものと思われていた物事のルールを失効させてしまうかもしれない。数多くの国々はこの危機に決着をつけることができないだろうし、危機以後のケースがしばしばそうであるように、危機の解消を理由に新たな生活秩序が目覚めることだろう。

私たちは家にとどまり、読書をしたり、シリーズ物のドラマを見たりしているが、現実には、私たちがまだ思い描くことのできない新たな現実をめぐる闘いの準備をしているのだ。もはやかつてそうであったようにはならないということ、ゆっくりと理解し始めているだけだ。家族を家の中に強制隔離し外出禁止にする措置によって、私たちは自分たちが何をいよいよやながら我慢しているに過ぎないのかを意識させられる。それは、家族が私たちの神経に障るということであったり、結婚の絆がもうとくに粉々になっているということであったりする。私たちの子どもたちを、強制隔離は、インターネット依存者として見捨てることになるだろうし、私たちの多くは、大衆の怠惰を理由に自分たちがまったく機械的に嵌り込んでいる状況の無意味さ・無益さを思い知らされることになるだろう。そして、殺人や自殺や精神疾患の件数が増加するとしたら、私たちはどうなるのだろうか。私たちの眼の前で消え失せ、雲散霧消するものは、過去200年以上にわたって形成されてきた文明のパラダイムだ。私たちは万物の霊長であり、すべてをなするのであって、世界は私たちのものだ、というのがその内容だった。

いまや新しい時代がやってきている。(訳・丸橋 裕)

オルガ・トカルチュクOlga Tokarczukは1962年、ポーランドのスレフフ生まれで、プレスラオ在住。2019年に2018年ノーベル文学賞を受賞。近刊に小説『ヤクブの書』がある。

お知らせ

内布敦子先生『Final Lecture』(Web開催)のご案内



2020年3月13日に予定されておりましたが、新型コロナウイルスの影響を考慮して中止とさせていただきます。内布敦子教授の『Final Lecture』を右記の通りWeb (Zoom) にて開催させていただきますことになりましたのでご案内いたします。

内布敦子教授は、本学の治療看護学・がん看護学研究室の教授として、開学当初より教育・研究・学部運営にご尽力されましたが、このたび明石のキャンパスで最終講義を企画しましたので、ご案内します。

テンポの良いいつもの講義と、内布敦子先生とのひと時をWebにてお楽しみください。

日時：2021年2月9日(火) 15時～16時

※この後17:00までWebにて座談会も予定されています。

場所：兵庫県立大学 看護学部 遠隔講義室 (Zoom)

*事前申し込みとなります。以下へアクセスの上、必要事項(氏名(卒業・修了生の方は卒業・修了年月も)、所属、連絡先等)を、2021年1月29日(金)までにご登録ください。

<http://apnhyogo.net/seminar/>

後ほど申込時のe-Mailアドレス宛にアクセス先など詳細をご連絡いたします。スマートフォンなどからお申し込みの場合、PCからのメール受信ができる設定にしておいてください。



幹事：治療看護学・がん看護学研究室

金外淑先生・勝田仁美先生 合同最終講義のご案内

日時：2021年3月5日(金) 14時～17時(予定)

場所：兵庫県立大学 看護学部 遠隔講義室 (Zoom)

金 外淑先生 (Dr. Woe-Sook Kim)

ご講義テーマ 「私の研究人生を振り返って
～日本へ留学・教育・研究・臨床の道～」

勝田 仁美先生 (Dr. Hitomi Katsuda)

ご講義テーマ 「看護の時代の潮流に乗ってきて…」

最終講義申し込みフォーム

<https://forms.gle/YWxkJZcWeHHExA3x7>



問い合わせ先

(先生方へのメッセージも受け付けております)
cnas2020finallecture@gmail.com



『金外淑教授ご紹介文』

金教授は2003年より長きに亘り、本学部で認知行動心理学、臨床心理学等の科目をご担当され、看護学部生・大学院生への教育に尽力されてきました。先生のご講義の受講生より、多くの学びと同時に癒しを得たと伺っております。

この度の最終講義に是非ご参加いただき、懐かしくも新しい学びの機会を共にできればと思います。どうぞ万障お繰り合わせの上、皆様ご出席くださいますようお願いいたします。

『勝田仁美教授ご紹介文』

勝田仁美教授は、開学当初より永年本学のために貢献されましたが、2021年3月をもって定年を迎えられます。先生の授業では、「子どもの言動には必ず意味がある」とお話しされ、多くの学生が先生の指導と人柄に惹かれ、小児看護に魅了されたのではないのでしょうか。

つきましては、本学での最終講義を企画しておりますので、多くの卒業生や在校生のご参加をお待ちしております。勝田仁美先生の新たな出発をお祝いしながら、先生のご講義をお楽しみください。



第1回理論看護研究会のお知らせ

「つくる・つかう・つたえる」をテーマとした第1回理論看護研究会を兵庫県立大学臨床看護研究支援センターの協賛で開催いたします。

日時：2021年3月6日（土）9時～16時30分（予定）

場所：Zoomによるオンライン開催

参加費：一般5,000円、学生（大学院生を含む）3,000円

HP：<http://theoretical-ns.umin.jp/index.html>

*演題募集：2020年11月30日（月）まで（要相談）

理論というとハードルが高そうですが、私達は、日々「現象」を経験する中で、その背後に何等かの規則性を見出したり仮説を立てたりしているものです。また既存の理論を参考に実践を組み立てておられることでしょう。そうしたことを言葉にして「つたえる」ことが看護の知を創ります。

学術講演は、実践と理論のリンクを目指し開発されて

いる状況特定理論のつくり方をテーマに、状況特定理論の第一人者であるEun-Ok Im先生（Emory University）、前兵庫県立大学副学長の片田範子先生（現：関西医科大学看護学部長）、兵庫県立大学の坂下玲子先生（臨床看護研究支援センター長）にお話しいただきます。また、演題発表では「つくる・つかう・つたえる」をテーマに、自分の看護実践や現象の言語化、理論を使った自分の看護実践や現象の説明、理論を使った実践や研究、概念分析や理論構築など、看護の専門性を明らかにするための様々な活動をみんなで共有する場を設けています。詳細はHP（<http://theoretical-ns.umin.jp/index.html>）をご覧ください。

ケアの大切さを学んだ県大CNAS卒業生の皆さん、あなたの中にある大切なもの、それに名前をつけてあげる方法をいっしょに探しませんか。ご参加お待ちしております。

会報発行協力金協賛者一覧（2020年9月30日現在）

令和2年

名誉会員

鵜飼和浩
近澤範子
南裕子
山本あい子

特別会員

鵜山治
川口孝泰
坂下玲子
松田裕子
吉本祥生

平10
得平（新川）佐織

平11
池原弘展
大森（田中）美和

平12
住岡（西村）まどか

平14
槻木（戸川）直子

平16
野長瀬（谷口）真由美

平18
榎瑞穂
宮城十子
渡邊佳世

平19
山村（福本）愛

平22
津田（柳瀬）萌子

平26
伊藤麻里子

平11博前
三輪（大崎）富士代

平12博前
成田康子
森菊子

平14博前
嶋田（三浦）せつ子
松枝美智子

平15博前
半田浩美

平16博前
松尾和枝

平17博前
蒲池あずさ

平22博前
池原（井上）知美

平14博後
渡辺かづみ

平15博後
寒河江（野澤）美江子

平17博後
近藤（佐藤）麻理
呉小玉

平21博後
工藤美子

平23博後
東ますみ
坂本真理子

皆様ご協力ありがとうございます。会報の一部に使わせていただきます。

けやき会からのご案内



けやき会 新役員

第19期：2020年6月～2021年5月

会長 奥村 和代
副会長 竹原 歩 西池絵衣子
会計 濱上亜希子 高橋美沙子
書記・庶務 武内 玲 栗村 健司
山岡 千鶴 田中 愛実

新体制で役員一同頑張っておりますので、皆様どうぞよろしくお願いいたします。



編集後記

今年に入り、COVID-19の影響を受け、会員の皆さまにおかれましては生活が大きく変わったことと存じます。また、卒業式が中止になり、卒業旅行に行くことも難しかった春休みを過ごされた新社会人の会員の皆さま、お元気ででしょうか。こんな時代が来るとは思ってい

ませんでした。その中で看護職として何ができるのか、考える機会の多かった一年だったように思います。皆さまがこの会報を通して、学生時代の気持ちを思い出したり、旧友や恩師へ連絡する機会にさせていただけると嬉しいです。

兵庫県立大学同窓会 けやき会 2019年度決算書・2020年度予算案

【決算書】収入の部 (2019.4.1 ~ 2020.3.31) 2020年3月31日

費目	2019年度決算額	備考
会費		
2019年度 学部入	¥940,000	94名×¥10,000
2019年度 修士入	¥58,000	5名×¥10,000 + 1名×¥8,000 (1期生のため)
2019年度 博士入	¥10,000	1名×¥10,000
2019年度 DNGL入	¥10,000	1名×¥10,000
平成27年度学部入学生	¥10,000	1名×¥10,000
平成11年度学部卒業生	¥10,000	1名×¥10,000
平成30年度博士後期修了生	¥10,000	1名×¥10,000
平成10年度学部卒業生	¥10,000	1名×¥10,000
平成18年度学部卒業生	¥10,000	1名×¥10,000
平成30年度博士後期修了生	¥10,000	1名×¥10,000
令和2年度学部卒業生	¥10,000	1名×¥10,000
雑収入	¥46	利子 (18+22+3+3=46円)
会報独立採算精算より余剰金返金	¥127,523	
学友会(ウェルカムキャンパス事業)より還元金	¥293,433	
令和元年度臨床看護研究支援センターより返金	¥3,424	
前年度繰越金	¥5,357,363	
収入合計	¥6,869,789	

【決算書】支出の部 (2019.4.1 ~ 2020.3.31)

費目	2019年度決算額	備考
I ホームページ		
年間管理費	¥86,400	
II 樺まつり 総会		
セミナー講師代金	¥284,124	
案内印刷・郵便利用料	¥300,739	
消耗品費	¥9,717	
III 会報		
会報印刷発送	¥200,000	
IV 大学への研究活動支援	¥70,000	
V 事務		
消耗品費	¥22,489	
通信費	¥541	
PC 並びに周辺機器	¥119,124	
VI CNAS 基金への寄付		
寄付金	¥500,000	
VII 役員交通費		
兵庫県立大学三大学合同懇親会旅費	¥53,176	2名分
交通費	¥5,213	
駐車場代	¥2,200	
VIII その他		
丸橋教授への花束	¥5,000	
講師謝品 (三大学合同懇親会)	¥5,574	
会費二重払い者への返金	¥50,000	
振込手数料	¥4,048	
支出合計	¥1,718,345	

2019年度決算残高 収入総計 ¥6,869,789
 支出総計 ¥1,718,345
 差引残高総計 ¥5,151,444

2019年度決算報告について監査を行い、以上相違ありません。

監査 中西永子
 井野友直

【予算案】収入の部 (2020.4.1 ~ 2021.3.31) 2020年3月31日

費目	2020年度予算案	人数	会費
会費2020年度 学部入学	¥1,050,000	105	10,000
修士入学	¥110,000	11	10,000
博士入学	¥0	0	10,000
DNGL 入学	¥0	0	10,000
前年度繰越金	¥5,151,444		
収入総計	¥6,311,444		

【予算案】支出の部 (2020.4.1 ~ 2021.3.31)

費目	2020年度予算案	備考
I ホームページ		
ホームページリニューアル費	¥165,000	
年間管理費	¥87,000	
II 樺まつり 総会		
案内印刷・郵便利用料	¥170,000	
消耗品費	¥10,000	
III 会報		
会報印刷発送	¥200,000	
IV 寄付		
大学への活動支援	¥500,000	大学で使用する物品購入・環境整備・活動費(けやき会会員に対する還元事業に限る)
CNAS 基金	¥0	
V 事務		
PC 並びに周辺機器	¥200,000	デスクトップPC、office、ウィルス対策ソフト、プリンター等
消耗品費	¥10,000	
通信費	¥5,000	
VI 役員交通費	¥80,000	
VII 予備費	¥100,000	
支出総計	¥1,527,000	
収支差額	¥4,784,444	

兵庫県立大学同窓会 けやき会 CNAS基金 2019年度決算書

【決算書】収入の部 (2019.4.1 ~ 2020.3.31) 2020年3月31日

費目	2019年度決算額	備考
I 寄付		
寄付-1	¥500,000	兵庫県立大学同窓会けやき会
II 利息	¥13	
III 前年度繰越金	¥1,418,593	
収入合計	¥1,918,606	

【決算書】支出の部 (2019.4.1 ~ 2020.3.31)

費目	2019年度決算額	備考
I 母校への寄贈		
寄贈-1	¥250,000	学術情報館 医中誌 Web版
II 振込手数料	¥216	
支出合計	¥250,216	

2019年度決算残高 収入総計 ¥1,918,606
 支出総計 ¥250,216
 差引残高総計 ¥1,668,390

2019年度決算報告について監査を行い、以上相違ありません。

監査 中西永子
 井野友直